四季の訪問

（120）

野田弘志 氏

（時習7回）

野田弘志氏近影（2018）

略歴

昭和30年3月　時習館高等学校卒業
昭和31年6月　森清治郎氏（豊39）に師事
昭和36年3月　東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻（小磯良平教室）卒業
昭和45年11月　初個展（銀座・三越）
昭和57年6月　初渡欧、各地の美術館を巡る
昭和58年5月　加賀乙彦『湿原』（朝日新聞）の挿絵を担当（628回－昭和60年）
平成3年6月　第14回安田火災東郷青児美術館大賞受賞
平成6年7月　第12回宮本三郎記念賞受賞
平成7年4月　広島市立大学芸術学部教授就任
平成7年8月　北海道伊達市にアトリエ新設
平成8年6月　広島県呉市の野呂山芸術村開設を機に現代写実絵画研究所を創立
平成14年9月　豊橋文化賞受賞
平成16年　中学校の美術教科書の監修
平成18年6月　伊達市による「だて噴火湾アートビレッジ」開設に伴い芸術監督就任
平成26年3月　ドキュメンタリー映画『魂のリアリズム 画家野田弘志』完成

▼天皇皇后両陛下の肖像画

2018年5月21日、宮内庁は天皇・皇后両陛下を描いた2m×2mの油絵肖像画が4年の制作期間を経て3月に完成したと発表した。この画を描かれたのが今回登場いただく野田弘志氏である。殺到する多くの取材依頼を固辞して制作に没頭される中、上京された機会をとらえ、両陛下の肖像画の件には触れないという条件で本誌インタビューに特別に応じていただいた。

▼豊橋へ

両親とも郷里は広島県福山市ですが、父が軍属だったので生まれは朝鮮（現韓国）。生後数か月で帰国すると5歳頃に上海に行き、終戦前年、行李一つしか持ち帰りが許されない状況の中を母と妹の3人でやっと帰国しました。父もその数年後に幸い復員でき、少年期は福山で過ごしました。

父は引揚げ後広島県三原市にある東洋繊維という会社の経理部門に勤務し、その工場が静岡県浜名郡にあったため転勤で新所原に住むこととなり、それで新所原から豊城中学に1年、時習館高校に3年通学し、時習館高校にはいつも豊橋駅から歩いて通いました。卒業後も浪人時代の1年間を豊橋で過ごし、2年目から両親を新所原に残して受験のため上京したので、豊橋での生活は通算5年になります。

▼時習館高校美術部

豊城中学で生田実先生という美術の先生が担任で絵について習った記憶がありますが、本格的に取り組み始めたのは時習館高校入学後迷いに迷った末に入った美術部です。夜遅くまで制作に熱中し、終電を逃して深夜に学校から新所原の自宅まで自転車で帰ったこともあります。浪人1年目も新所原から美術部室に毎日通っていました。

後輩の人材も豊富で特に1年後輩の牧野圭一君（時8－後に漫画家）は、新築されて新しくなった部室の中二階にあった物置に寝具を持ち込んで住み着いていて、私も時々そこで泊まりました。泊まり込み生活を好む傾向は生来あったと見え、後年、広島市立大学芸術学部教授（現名誉教授）を1995年から10年間務めた時も研究室（アトリエ）に生活道具を持ち込んで半ば泊まり込んで制作し、夜間巡回に来た守衛に驚かれたりしていました。

2年後輩の林隆男君（時9－後にタイプバンク創立者）は東京に出て写植の会社に就職した後、鈴木翠軒（四10）先生を訪ねて文字の研究を始め、日本で初めて創作文字の会社を作りました。この3人で受験のこと等を話し合うことが多かったですね。

▼恩師、冨安昌也氏（豊37）

美術部ではやはり冨安昌也先生が大きな存在でした。当時、時習館高校の傍らにあった官舎2棟にお住まいで、一つを自宅もう一つをアトリエとして使われ、アトリエの方に画集がたくさん備えてありました。東京美術学校の藤島武二教授の教室を首席でご卒業された方。藤島武二は豪快なタッチでグイグイ描くのが特徴で、当時、日本で一番本格的な洋画風な描き方をした一人でしたが、冨安先生の画風はその藤島武二の流儀を少しおとなしくしたタッチ。色彩感覚に優れ、手さばきで描くような感じで随分その影響を受けました。

冨安先生が豊中時代に師と仰いだ水彩の細島昇一先生も当時日本水彩画会の幹部としてご健在でそこに出展する美術部員もいました。細島先生は当時東京中野区の哲学堂公園近辺にお住まいでそこに届け物をしたことはありますが、細島先生からは直接何も教わっていません。

▼恩師、森　清治郎氏（豊39）

卒業して浪人2年目に上京して勉強する旨を冨安先生に申し上げたら、先生は「じゃあ森君を紹介しよう」と言って森清治郎氏に声をかけて頂きました。それで森さんが丁度三越で個展をしておられた時にその会場にお伺いしてご挨拶し、以降、中野にあった森さんのアトリエにしょっちゅう出入りするようになりました。森さんは驚いたことに冨安先生に批判的で、冨安先生の紹介でお会いしたのにも拘わらず、お会いすると直ぐに冨安批判を始め、「あんなの真似するな」と言われました（笑）。冨安先生がグイッと一気に描くのに対して、森さんはたどたどしく一つ一つを丹念に描くというわけでまるで違うのですね。私が冨安流に描いていたら、「絵は心で描くのだ」と、こてんぱんに言われ、そういった精神的な面では森さんに随分影響を受けました。冨安先生はそのように口頭で具体的な指導をすることはなく黙って制作する姿を見せ、そこから何かを感じとれというやり方でした。どちらもいい先生でしたが、冨安先生は特にデッサンの名人で、後に私が写実絵画を制作の中心に据えると冨安先生も更に細かくピチッとデッサンを描かれるように

なり、それは見事でした。森さんはデッサンについては冨安先生ほど緻密ではなく、むしろ大雑把でゴツゴツした描き方でした。

▼恩師、小磯良平教授

大学では自由で何でもできるという評判の小磯教室を志望しました。でも教室所属は大学4年時の1年間だけでしたし、教授も丁度フランスに官費留学しておられてほとんど不在だったこともあり、実質的には教授からは何の教えも受けていません。学生との懇親会での接点は少しありましたが(笑)、宴会でも30分もすると会費を払って退席されてしまう。歌を所望すると賛美歌を歌う、という方でした。

小磯教室に所属する以前、同期生は一堂に会して習作し、小磯良平の他、林武、伊藤廉という3人の教授が回って来られるわけですが、大病院の院長回診のようにお供を連れて我々の間をスーッと通って行かれるだけで、先方から「ここを直せ」とか言われることはない。こちらもお声掛けするのに勇気がいる。というわけで直接見てもらう機会はほとんどなかったですね。

▼初の個展―画家への道を決意

1961年に藝大を卒業してからは東急エイジェンシーを皮切りにイラストレーターの仕事をし、多忙で絵描きになりたくてもなれない状態でした。ところが1969年、胃癌の手術を受けました。当時、『パーゴルフ』という月刊誌の表紙イラストの仕事を創刊号からずっとやっていたのですが、突如手術で入院してしまったのでそういう雑誌連載が途切れる。結局それがきっかけでその仕事を止めることになりましたが、そんなことでもないと止められないですね。『パーゴルフ』の編集長が真っ赤な顔で入院中の私の病室を訪れ、「表紙をどうしてくれるのだ」とすごい剣幕で言われましたけどどうすることもできない。逆にこれが連載の仕事を止めるいい機会であるし、これを逃したら絵描きになれないと思ったので退院してからはコマ切れの単独の仕事しか受けないようにし、何とか絵を描こうとしていたら、1970年、森さんが「三越銀座店で自分の個展の予定があるのを譲ってやるからそこでお前の個展をやれ」と言ってくれたのですね。

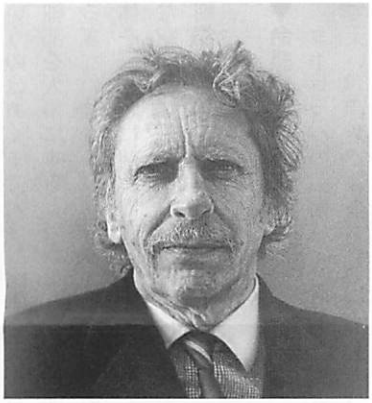
その時の三越の美術担当者に見本として黒バックに花を描いた絵を見せたら、「黒いバックは駄目です、これでは個展はやってあげられません」と言われた。森さんに相談したら「『はいはい』と返事をしておいて黒バックで描けばいい、会場で開けてびっくりでいいじゃないか」(笑)と。それでそのとおりにして出品したら何と全品完売。以降、三越は黒バックの絵を依頼してくるようになった(笑)。森さんにはそうやってとことん最後までお世話になりました。それは時習館のお蔭でもありますね(笑)。

▼初渡欧

森さんは美術学校に行くよりも西洋絵画を生んだ土壌を自分の足で踏みしめ、その地の気候・風土・人間を見てその空気を直接肌で感じることが重要、というお考えで1957年にパリを中心に欧州を見ておられます。また、現地で彫刻作家とも知り合いになったりしていい勉強の仕方をされたと思うのですね。ですが、私は森さんのように若くして欧州に行く機会もなかったので、本を読んで学ぶことによりヨーロッパ文化・美術の根っこを自分で探ろうとしていました。ですが日本語の翻訳書はたくさんあっても、いくつかを読み合わせてみないと原語の本当のところがわからないことがある。そういう意味で1982年、なじみの画商の誘いと案内で1カ月程西欧各地の美術館を見て回れたのは本物に触れるいい機会でした。

▼ベルギーでの個展

1990年と1994年の2回、ベルギーのゲントという町にあるゲント・ヴェラヌマン美術館で個展を行っています。きっかけは西武百貨店社長だった堤清二氏が1984年に有楽町西武の中に有楽町アート・フォーラムというのを開館し、1988年10月、そこで私が「明晰なる神秘」という個展をやったことですね。すると翌11月、同じ場所で堤さんがベルギーの画商であったエミール・ヴェラヌマンという人物の私的コレクションから40点程の作品を借りてきて「ベルギー近代美術の歩み展」というのをおやりになった。



野田氏作品
『エミール・ヴェラヌマン像』(1990)

ヴェラヌマンは、本職は画商なのですが、外交官としてのパスポートを持ち、万博とかの際にはベルギー館の設計責任者であった程の人物。また家具のデザイナーという側面も持ち、彼の手になる家具は作品番号入りで相当高価なものなのですね。その「ベルギー近代美術の歩み展」のために来日していたヴェラヌマンが偶々展覧会会場で私の作品を見、西武の人を介して私に「会いたい」と言ってきた。それでお会いしたら「俺の美術館でお前の個展をやらないか」という話で、非常に偶然な出会いでした。

▼写実―「存在」の重みと凄み

日本の美意識は非常に審美的、情緒的で「綺麗なもの」が美しい、と言うことが多いですね。美しいとは何だ、と更に考えないといけないと思うのですけど、そこまではほとんどの人は考えない。西欧では「存在」ということを否応なしに皆が意識し、「存在」が美しいという見つめ方をすると思うのです。日本では存在を描くと言ってもなかなかその真意が伝わらないのですが、西欧では伝わるのですよ。

例えば人間を立体構造としてつかまえる、というのが西欧絵画の考えなのですが、日本ではとかくモデルだけを立体的に描けばいいと思いがちです。そうではなくてそこにある床も壁もがっちり存在していなくてはいけない。それをしっかり全部描くとそこに空間が出て来る。極端にいうと人間だけではなく、それを含めた空間を描くということが立体構造をつかまえるということ

であり西欧流であると私は解釈しています。それが「存在」を描くということで、空間は何もないものではなくて見えなくても内実を持ったもの、磁場のように何かが張りめぐらされているものと考えたいですね。

他の例ではスペインの現代作家でアントニオ・ロペス（1936～）という作家がトイレを描いている『便器と窓（1968～71）』という作家がありますが、トイレという物体だけでなく、そこに生活している人間を彷彿とさせるような空間を描いている。人間を描いていないのに人間の鼓動が伝わるのですね。そのように見たままのものだけでなく見えないものをも心の奥底に感じ、それを見つめながら空間全体を絵画という哲学で再創造することが写実の本質だと思うのです。

▼「神は細部に在り」とは

「単純は偉大なり」という言葉があります。ドイツのヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマン（1717～68）という学者が1755年に著した『ギリシャ美術模倣論』の中でギリシャ彫刻を「高貴の単純、静かな尊厳」と評していますが、その言葉に由来するといわれています。私はこの考え方に共鳴していて天皇皇后両陛下の肖像画を描くことになった時もお会いした時にそういう考えで描きたいと申し上げました。

一方「神は細部に在り」という言葉もあって、これはドイツのアビイ・ヴァールブルク（1866～1929）という美術史家が1925年にハンブルク大学で行った講義で述べたものです。一つ一つの言葉の中に大事なものが含まれており、文献を調べる時には細部を大事にするべきであるという意味で語られたのですが、私がそれを芸術の方にも引用しているものです。その意味は結局ヴィンケルマンの「単純は偉大なり」と同じなのです。ところが、「神は細部に在り」というとただ細かく細密描写すればよいと誤解されることが多いのですね。単純というのはそういうことではなく総体として捉まえるという意味をいうのです。

例えばナポレオンの死後2日目に作られたといわれるデスマスクを見たことがありますが、耳が削ぎ落とされ、毛髪もない状態で作られており、ぞっとするぐらい迫力があります。それが単純化ということで耳も毛髪も落としたお蔭でズドーンと存在の凄みが逆に浮び上がる。密度がきちっとあって総体として大きく掴んでいるから単純なので、単純であるほど美しく見えるし、ある種の超越がそこにあるのですね。

野田氏作品
『聖なるものTHE-Ⅳ』（2013）鳥の巣

ドイツの往年の名指揮者、ヴィルヘルム・フルトヴェングラー（1886～1954）も「全て偉大なものは単純である」という言葉を残していますが、意図するところは同じだと思います。「神は細部にあり」というのはあくまで大きな総体を支える中で細部を大事にするということで、細部が揺るぎない強さを以って表され、調和ある全体を築く時に初めて画面全体が崇高で神聖な空間になるわけで、すべては全体であり細部でもあるということですね。

▼命懸けということ

ヨーロッパの芸術はとてつもなく大きくて深い。音楽ではバッハ、ベートーベン、美術でもギリシャが凄いですが、ルネッサンスのダ・ヴィンチとかミケランジェロ等、皆、観察する力とそれを表現する力が抜群の人達です。ロマン・ロラン（1866～1944）に言わせると「血をもって描く」というのですが、命懸けということだと思うのです。詩人のライナー・マリア・リルケ（1875～1926）も結婚して1年もたたない内に『ロダン論』を書きたいと言って、奥さんと別居してパリのオーギュスト・ロダン（1840～1917）の処に行くのです。奥さんに対してこまめに手紙は書くのですが、娘の結婚式にも出席せず、最期には薔薇の棘が刺さって死ぬ。

そこに横たわるのはヨーロッパでは自分の思索のためには孤独が大事だと考えている人が多いということですね。私は日本では孤独よりも孤立するぐらいでないと駄目だと考えており、仕事本位の生活を送るため、社会的儀礼を欠くことにもなりますが、お付き合いを一切止め、食事以外は終日殆んど絵を描いています。ポール・セザンヌ（1839～1906）などは絵を描くために母親の葬式にも出なかったといわれていますが、そのぐらい命を懸けなければできないような内容、目的、目標があるわけで、それを命懸けで、血でもって綴り、彫り、描くという時代があったのですね。そしてそんな時にこそ一番凄い作品が生まれている。ヨーロッパの絵画を学ぶ身としては、そういう姿勢を学ばなければいけないだろうと考え、遅ればせながらやろうとしているのですけど、なかなかできない（笑）。ダ・ヴィンチは「芸術に完成はない、ただあきらめだけだ」と言っていますが、私もひたすらに描き続けながら、多くの画家が辿る道を一歩一歩、生涯を掛けて進もうと考えています。

▼豊橋美術博物館とホキ美術館

私の初期作品の収蔵量は豊橋美術博物館が多いのですが、ホギメディカルの名誉会長である保木将夫氏により2010年、千葉市にホキ美術館というのが写実絵画専門美術館として開館され、最近作の大半は、2001年にノーベル化学賞を受賞された野依良治先生の肖像画を含め、ここに収蔵されています。その結果、作品の収蔵量は豊橋美術博物館と双璧となっていますので、両館を訪れて観てくだされば嬉しいです。

（中村　一行）

野田氏作品
『崇高なるもの-OP.6』(2016)野依良治像